

清末期における張謇の教育改革に関する考察
—日本人教習の誘致や日本の教育制度の受容をふまえて—
A Study of Zhang Jian's Educational Reforms in the Late Qing Dynasty
—Based on the Attraction of Japanese Teachers and the Acceptance of the Japanese
Educational System—

王 昊天
WANG Haotian

目次

はじめに

- 1 張謇による教育改革の措置及びその背景
 - 1.1 学校規模の急激な拡大と師範教育の興起
 - 1.2 張謇の実権の源
 - 1.2.1 「状元」としての張謇
 - 1.2.2 政府有力者との密接な関係
- 2 日本人教習を招聘した背景
 - 2.1 張謇が日本の教育制度への理解の需要
 - 2.2 通州師範学校の総合学校への発展
- 3 吉澤嘉寿之丞・森田政夫妻と張謇とのかかわりの調査
 - 3.1 吉澤嘉寿之丞・森田政夫妻に関する調査
 - 3.1.1 吉澤嘉寿之丞・森田政夫妻の経歴
 - 3.1.2 中国に渡った理由の検証
 - 3.1.3 森田政による音楽教育の実践
 - 3.1.3.1 「池中之金魚」
 - 3.1.3.2 「風車歌」
 - 3.1.3.3 「学堂楽歌」を作った理由
 - 3.2 張謇とのかかわり
 - 3.2.1 張謇の吉澤嘉寿之丞への不満の検証

3.2.2 張謇の吉澤・森田政夫妻への優遇

おわりに

- 1 日本人教習の誘致に関して
- 2 吉澤嘉寿之丞・森田政夫妻に関して

注

参考文献

はじめに

本研究は中国教育の近代化過程における中国江蘇省通州の重要な歴史的人物である張謇の教育改革と日本人人材の誘致や日本の教育制度の受容に関して考察するものである。とりわけ、京都外国語大学建学にもかかわる吉澤嘉寿之丞と森田政ご夫婦と張謇とのかかわり、中国南通における中国の師範教育事業への貢献に関しても考察する。

張謇（1853～1926）は中国近代の著名な民族資本家であり、「実業による救国論」「教育による救国論」の代表的な人物として、日本の渋沢栄一と並び称えられるほどの人物である。張謇は実業と政治以外に、中国最初の私立師範学校通州師範学校（現・南通師範高等専科学校、以下「通師」と略す）の創設など、教育分野でも優れた貢献があり、実業家であると同時に、教育家であるとも言えるだろう。

中国の教育制度は近代に入り、徐々に発展してきた。清朝末期、中国は西欧列強の侵略を受け、半植民地と化した。一方、日本は明治維新後、急速に発展し、中国人は各分野において、日本に学ぼうとする姿勢を打ち出し始めた。特に教育の分野では、当時の教育制度は日本をモデルにしていたと言える。

1903年、日本の学校制度に基づいた「奏定学堂章程」が公布され、1904年1月から中国全土で実施されることになった。教育の近代化を推進する際に、当時の有識者は国内の人材である「内才」に協力を求める一方、多くの「外才」、とりわけ日本人を顧問、或いは教習（教師）として招聘し、日本人人材の活躍に期待をかけた。そして、中国に渡ったこうした日本人教師は、当時、「日本教習」と呼ばれていた。

この時期、通州地域の教育の発展は、中国全土の最先端にあった。20世紀の初頭、幼稚園、小学校から高校、師範学校、女子学校、各種専門学校まで、より総合的な教育体系が確立されつつあった。特に、張謇の設立した中国最初の民間師範学校「通師」は、南通地域に多くの優秀な人材を輩出しただけでなく、陝西省、山西省、甘肅省から学生を受け入れ、卒業生は、地元の教育の中堅になっていた（注1）。

通州地域の教育の発展も、日本からの影響とは切り離せない。1903年、日本が大阪で第5回内国勸業博覧会を開催した際、張謇は当時の在江寧日本総領事（江寧は現・中国江蘇省南京市）である天野の招きで、4月25日の上海行きから始まり、4月27日に日本の船舶「博愛丸」で出発し、6月6日に上海に戻るという約70日間の日本（関西地域）での現地

考察を行っていた。この間、張謇は日本の産業、商業、教育の実情に着目し、その実態を観察した。特に、小学校と女子学校を中心に見学していた（注2）。帰国後、南通に日本人教習を招き、さらに、教員や学生を日本に留学させた。そして、これらの人々の活動は、南通地区の教育の発展と日本との結びつきを示す証拠であると筆者は見ている。

中華人民共和国建国以来、張謇に関する研究は途切れることなく続けられ、特に企業経営と政治的活動の分野で、中日両国でも盛んに行われている。一方、教育分野に関する研究では、「実業」、「政治」の分野より少ない。

教育分野に関する先行研究では、張謇が「通師」に採用した日本人教習の数は7人とされている。しかし、『南通師範学校史』には「学校不惜重金先后礼聘了木造高俊、西谷虎二、木村忠治郎等8位日籍教习来校任教（学校「通師」では、木造高俊、西谷虎二、木村忠治郎を含む8人の日本人教師を招聘した）」という記載がある（注3）。筆者が、「通師」の後身である南通師範高等専科学校に確認した結果、この8人目の日本人教習は算数・理科教習吉澤嘉寿之丞の妻、通州女子師範学校の教習として働いていた森田政（注4）であることが判明した。現存している「通州師範学校教習表」と「女師範教習表」（注5）により、張謇が設立した私立の「通師」は京都外国語大学の創設者・森田一郎氏の両親吉澤嘉寿之丞、森田政夫妻が「教習」として教鞭をとっていた学校だったことが分かった。曹炳生、都樾の『吉澤嘉寿之丞和森田政夫婦在南通任教档案资料集』（注6）では、吉澤嘉寿之丞が1904年から1914年までの10年間、「通師」など中国の新式学校で数学、理科、製図を教えていた。また、1916年に松本亀次郎とともに東京で東亜高等予備学校（注7）を共同で設立したという。森田政は通州女子師範学校の教習を務めていた以外に、張謇の長男である張孝若の家庭教師も担当していた。本調査により、京都外国語大学創設の背景の一端が窺うことができる。

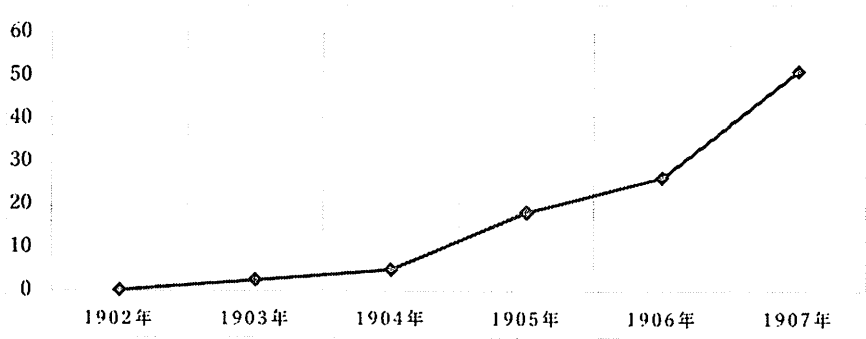
本論文では、これまでの研究を踏まえ、清末期における張謇の教育改革が果たした役割について検討し、とりわけ先行研究であまり取り上げられていない部分について、より詳細な史実を明らかにすることを目指す。

1 張謇による教育改革の措置及びその背景

1.1 学校規模の急激な拡大と師範教育の興起

日清戦争後、中国の教育制度も徐々に日本型に移行していった。「富国強兵」を目的に技術学校や外国語学校が整備された洋務運動とは異なり、「全民教育」の形をとっていたと思われる。それゆえ、新式学校の規模も生徒数も急成長していた。図1から、この時期、全国的に学生数が急激に増加したことがわかる。特に1904年に「奏定学堂章程」が發布されてからは、制度や政令に支えられ、成長率はさらに高まった。以下の図1は清末期の学生数の増加一覧である（注8）。

図1 清末期の学生数の増加



「奏定学堂章程」では、教員需要の問題を解決するために師範学校の整備を優先することが明示されている。以下は章程原文の一部分を引用する。

学堂必须有师。此时大学堂，高等学堂，省城之普通学堂，犹可聘东西各国教员为师。若各州县小学堂及外府中学堂，安能聘许多之外国教员乎？此时惟有急设各师范学堂，初级师范以教初等小学及高等小学之学生，优级师范以教中学堂之学生及初级师范学堂之师范生。

（学校には教師が必要である。現在、大学堂、高等学堂、省城の普通学堂では、外国人教員を採用することができる。しかし、州や県の小中学校であれば、外国人教員を雇うことは可能なのだろうか。今は、各級の師範の設立を早めるしかない。初級師範学校は、初等小学校と高等小学校の教員を育成する。優級師範学校は中学堂と初級師範学校の教員を育成する。）（注9）

この章程が發布された後、中国全土で師範学校は急速に増加した。下記の表1（注10）によると、中国各地の師範学校は、1907年には541校と急成長し、学生数も36,091人となった。

表1 中国の師範学堂と師範生統計表（1907年）

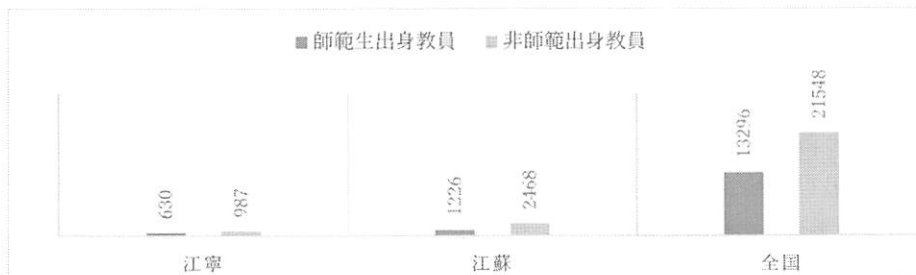
	師範学堂数	師範生数
全国	541 所	36091 人
江寧	13 所	1933 人
江蘇	13 所	1686 人
通州（南通）	3 所	299 人

師範教育は、教師という人材の需要の高まりとともに、興起してきたものと思われる。このことは、先に取り上げた「奏定学堂章程」にも反映されている。師範教育が盛んになった理由を知るには、学生の数を調べる必要がある。以下の表2は、1907年の中国の小学堂と小学生統計表(注11)であり、図2は1907年小学堂教員資格の比較の一覧である(注12)。

表2 1907年中国の小学堂と小学生統計表

	高等小学堂	両等小学堂	初等小学堂
江寧	47所(2126人)	72所(2733人)	479所(10777人)
江蘇	45所(2713人)	144所(6959人)	626所(18335人)
全国	1955所(84623人)	2451所(126191人)	29199所(684657人)
通州	4所(389人)	9所(333人)	170所(3726人)

図2 1907年小学堂教員資格比較



この時期、小学堂、特に初等小学堂の学校数と生徒数が目覚ましく増加した。表2で分かるように、1907年、全国の初等小学堂の数は29,199校、生徒数は684,657人に達していた。基礎教育の普及は師範教育の興起を促進したとともに、師範教育の発展も基礎教育の質をも向上させた。図2から分かるように、中国全土の小学堂教員に占める師範学校卒業生の割合は、1907年には38%に達していた。これも、日本の学校制度から学んだ結果だと考えられる。

1.2 張謇の実権の源

中国は1895年の日清戦争以降、すでに日本から学び始めていた。教育制度の学習、新式学校の創設により、教師に対する需要が高まった。また、教師不足の問題を解決するために、師範学堂の数も急速に増えた。つまり、近代師範学堂の創設と運営は、張謇だけの考えではなく、時代の要請であったとも考えられる。しかし、張謇の創設した「通師」は、

当時としては際目立っていただけでなく、中国近代史にも目覚しい足跡を残したのである。

張謇は、この時期に教育改革と日本をモデルとした学校の設立を比較的順調に進めることができたが、これには強い実権の後押しが必要だった。それゆえ、張謇に持っていた実権や先見性を検証することにより、教育改革体制を創造するための外的条件を明らかにすることができると考えられる。

1.2.1 「状元」としての張謇

明らかなのは、科挙試験の最上位「状元」という身分に伴う社会的地位の高さである。清朝は法律上、科挙試験の合格者に特権を与えた。主に次の3点に反映されている。

1、刑事に関する特権。科挙試験の合格者は犯罪行為を行った場合、まず栄誉を剥奪し、平民に降格させる。そして一平民として処罰する。このほか、当時は「吏卒骂举人比照骂六品以下长官律杖七十(役人が举人を罵った場合には、六品以下の官員を罵る場合と同じ鞭打ち70回の刑に処する)」という規定もあった(注13)。

2、労働と徭役に関する特権。当時の法律では、科挙試験の最下級合格者である秀才から状元までは徭役作業を免除されることになっていた。このほか、第二級合格者である举人から始め、官員候補になっていた。

3、経済の特権。徭役が免除されるだけでなく、功名に応じて経済的な手当も支給されていた。

この3つの特権、特に第一の刑法に関する特権は、法律的な意味で科挙試験の合格者の社会的地位を高めるものであった。「状元」である張謇は、これらの特権に加え、「翰林院修撰」の六品官職が与えられ、士紳と官員を兼ねた「官紳」となった。それゆえ、彼の地位は南通の一般官吏と士紳より、ずっと高いものであったと考えられる。

1.2.2 政府有力者との密接な関係

張謇の実権の源について、単に官員になって士紳階級に属していただけで説明しきれない点がある。

張謇の幼少期は、儒学を学んできた何百万人もの読書人たちと何ら変わりなく、日々勉強に集中し、一步一步前進し、科挙に及第して栄誉を受け、士大夫の階級の一員になることを目指していた。16歳の時、張謇は秀才の身分を得ることで平民の身分から抜け出すことができた。だが、家族はまだ苦境にあった。

家庭の苦境を和らげるため、張謇は20歳で孫雲錦(元・通州の知州)の下で働き始め、1876年に呉長慶(清国軍隊“慶字營”の最高長官)に招かれて軍隊の幕僚となり、約8年間の軍隊生活を送った。

1882年、朝鮮で「壬午軍乱」(注14)が起こり、朝鮮政府は清朝政権に援護を求めた。張謇は呉長慶の軍に従い、朝鮮に渡り、反乱を鎮圧することになった。彼は朝鮮滞在中、呉長慶への助言役で、「壬午軍乱」の解決にも大きく寄与したと思われる。しかし、清朝政権の内部における派閥の抗争のため、呉長慶は李鴻章(注15)に攻撃され、2年後に病死

した。張謇も幕僚生活を終え、南通に戻った。

この間、張謇は「主戦不主和（講和ではなく戦うことを主張する）」という清国政府の外交政策に対する考え方から、当時の清国政府の主要な権力集団である「清流」（注16）のリーダーである翁同龢に気に入られるようになった。張謇は「清流」の重要な一員になった。

その後、翁同龢の指導によって張謇自らの力で、1894年、何度かの会試（科挙試験の第三級、合格者は「進士」の功名を得て、官員になった）の不合格の結果、ようやく会試の10位となり、最終試験「殿試」（会試の上位10人が参加でき、試験官は清朝皇帝である）に臨むことができた。結局、張謇は最上位「状元」の榮譽を得て、官員の仲間入りを実現することができた。

張謇が新式学校を建設し、教育改革を進めていた際、すでに官職を辞して実業界に身を置いていた頃であり、南通地区の支配者でもあった。一連の改革ができたのは彼の士紳身分の影響に加え、当時の権力者たちからの後押しとも切り離せないと思われる。実際、張謇が資本主義的な大生糸工場を設立した際、「清流」と「洋務」の身分を併せ持つ権臣である張之洞が「总理通海一带商务」（注17）を委任したという名目だった。このことから、張謇本人はすでに官員ではないものの、政府とのつながりが薄れたわけではないことがわかる。この特徴は、民国時代にも続いていた。

張謇の教育改革に対する政府の態度は、1902年、当時の两江総督である劉坤一の言葉から窺える。1902年、張謇は「通師」の創設を求めるために、劉坤一に「通海請立師範学校公呈」を提出した。そして、劉坤一は張謇に宛てた承認書の中で、民間の士紳に私立学校を創設するように依頼した。以下、その原文の一部を引用する（注18）。

兴贤育才，首重师范，在官费拙，造就未宏，全赖贤绅士就地筹设，辅官立之不及，冀推行之渐广也。

（人材育成のために最も重要なのは、師範教育である。政府は今資金不足により、師範教育の展開が進まない。賢人や士紳に頼って、現地で学校を計画・建設し、官の力が及ばない点を助けてもらいたいと希望している。）

清朝末期、清は多くの対外戦争に敗れ、主権が徐々に失われていっただけでなく、多額の戦争賠償金を支払うという結果を招いた。これにより政府も資金不足に直面した。民間人に仕事を任せることになる原因が、相手方がその地域で高い社会評価を受けているだけでなく、政府資金の圧迫をある程度緩和するためでもあった。それゆえ、張謇のような大物実業家と手を組めば、政治的な協力も得られる。つまり、張謇と政府当局との緊密な関係は、張謇自身の力だけでなく、互いのニーズが合致した結果であったとも言える。

清朝末期、張謇は「状元」の身分をもって士紳階級という上流社会に入り、当時の権臣たちから強い後押しを受けていた。この2点が、彼の実権の源となったと見られる。こう

した実権の源は、いずれも封建制度のおかげであることとは切り離せないことも明らかである。

戊戌変法が失敗すると、張謇は官職を辞して故郷に帰り、政治から離れ、実業と教育に全力を注ぐようになった。彼は、教育や産業の成果によって、落ち目の中国を救おうとしたが、政治に関わらないようにしても、その改革構想は政治に付随したもので、あらゆる面で清国政府の制度による制約を受けざるを得なかったとさえ言える。張謇は実業革命・教育改革活動において「通官商之郵」、政商の郵便代理人としての役を演じていた(注19)、と章開沅が評価した通りである。

2 日本人教習を招聘した背景

2.1 張謇が日本の教育制度への理解の需要

張謇の教育改革は、官職、官僚の世界を離れ、故郷で正式に実業と教育の道を歩み始めたところから始まった。1901年、張謇は全国紙『申報』(1901年3月27日の号)で「変法平議」を発表し、政治、経済、軍事、教育の各分野における自分の改革構想を提言した。

しかし、張謇の「変法平議」は1901年に出版されたが、教育改革に関する主要部分は、1872年に日本文部省が出版し実施した「学制」を参考にした可能性が高いと考えられる(注20)。1879年に日本文部省は「教育令」を公布し、「学制」は廃止されており、張謇の「変法平議」が引用した日本の教育制度は、実は20年以上遅れていたのである。

この頃、張謇はすでに「通師」の建設準備を始めており、その制度や規約の整備は、旧制度を踏襲していれば改革とは言えないものであった。したがって、日本の最新の教育制度を採り入れ、それを基準として「通師」の最も適切な規則を策定することが最も重要であるという張謇の意図が窺える。

張謇が「通師」に招いた最初の日本人教習は、木造高俊と吉澤嘉寿之丞であった。木造高俊は東京帝国大学漢文専科を卒業した後、当時日本人が中国に設立した東亜同文書院の教授で、清国諸制度及び律令という科目を担当していた。

このような適才は、まさに張謇のニーズに合うものであり、彼が「通師」にもたらす変化を楽しみに期待していた。しかし、悲しむべきことに、1906年6月、張謇が日本を訪れ、実業と教育など、日本の実態を考察し、帰ろうとしたその時、木造高俊が南通で自殺してしまった。

2.2 通州師範学校の総合学校への発展

張謇の「通師」も、1903年の創立当初から多くの日本人教習を採用した。表3は「通師」に勤務した日本人教習一覧表である(注21)。

表 3 通州師範学校に勤めた日本人教習一覧表

氏名	勤務時間	担当科目
木造高俊	1903.3～1903.6	日本語
吉澤嘉寿之丞	1903.3～1906.1	算数・理科
森田政	1904.3～1907.2	女子師範教習
遠藤民次郎	1904.1～1904.8	算数・地理
西谷虎二	1904.1～1914.12	日本語・教育
木村忠治郎	1904.8～1911.1	教授法
宮本幾次	1907.3～1909.1	測量
照井喜三	1908.2～1909.1	農科

上記の表 3 からわかるように、「通師」に採用された日本人教習は、師範教育の分野だけでなく、工学や農業などの職業教育の分野の教習も何人かいた。そこから張謇の先見性が窺え、「通師」の総合学校への継続的な発展につながるものであると彼は考えていたと思われる。

「通師」は、最初は小学校の教員育成、南通地域の教員不足の問題解決を目的として設立された初級師範学校であった。その後、師範科のほかに、測絵科、農科、虫桑科、工科などの専門学科も創設され、附属小学校も多数設立されていた。

基礎教育の普及に加え、附属小学校の設立は師範科の学生に実習の場を提供するためでもあった。『通州師範学校学課章程』には、師範科の学生の実習時間が定められており、4年生は週 4 時間となっている。師範学校が小学校を併設していることはよくあるが、複数の専門学科を持つことは当時、あまりなかった。

当時、第一高等学校のような日本の高等教育機関では、芸術・科学・医学など、複数の分野も設けられていた。しかし、日本の官立高等学校は大学予科という位置づけによるものであるゆえ、専門科を設立し、大学進学希望者に専門課程を提供するというシステムとなっていた。しかし、中等教育レベルの教育機関である通州師範学校の卒業生は、直接大学に進学するわけではないため、通州師範学校の専門科目は日本の大学予科のそれとは異っていた。

「通師」に専門学科を幾つか設置したことは、張謇の地方自治や企業経営とも結びついていたと思われる。

1901 年の『変法平議』の中で、張謇は測量や地図製作の人材を優先的に育成する必要性を訴えていた。以下は原文の一部を引用する(注 22)。

一学堂先学画图

…図，固变法之轨道哉！測量、画图之学，本不能深，学以半年，即能成就。

(改革のひとつが、学校ではまず絵を教えること。

…図は改革の軌道だ！測量製図の学問は奥が深いものではないが、半年も勉強すれば習得できるものと思う。)

この当時、張謇は測量や製図の重要性を認識しながらも、それを習得することの難しさを甘く見ていた。それに加えて、張謇は小学校で測量や地図を学べば十分だと考えていた。この改革案は、あくまでも理想論と考えられる。張謇もこのプログラムの理想主義を意識してか、教育改革を実施するためのモデルとしては用いられなかった。

1906年、「通師」に測繪科（測量製図科）を設置し、測繪（測量製図）人材を育成し、南通の測量製図事業を発展させた。その前に、「通師」の師範科では、製図や算数も設置しており、ある程度、測量や地図作成を学習するための基礎となった。

しかし、その後、測繪科（測量製図科）は専門の教習がない状況に直面し、1906年9月と1907年2月には、測繪科（測量製図科）の科目は師範科とは変わらなくなった。そのため、張謇は、日本国籍の教員・宮本幾次を雇い、測繪科の専門科目を担当してもらった。

1908年、「通師」に工科が設置され、さらに測繪科から9人の卒業生が選ばれ、工科で学ぶことになった。教習は引き続き宮本教習が担当した。工科の設立は張謇の「実業による救国論」という理念と密接に関係していると考えられる。

1905年、張謇は「请设工科大学公呈」の中で、「日本崛起先图工业」（日本の興隆は工業を先行させたことによる）と、国を発展させるためには工業の発展が重要だということに触れていた。また、「苟欲兴工，必先兴学」（工業を発展させるには、まず学校を創設しなければならない）、「不至如今日实业之摠埶冥行，瞎骑盲进」（今の実業のように暗中摸索しながら、盲目的に前に進むとは異なる）と訴え、工学は実業発展のための指針のようなものだと指摘した（注23）。しかし、この提案は採用されなかった。南通地域の民間資本だけで大学を設立することは現実的ではないこと、既存の「通師」に工科を設置することが、自分自身の改革案を実行する重要な方法だと認識しただろう。

農科は1907年に「通師」の4つの専門学科の中で最も長い3年の修学年数で設立された。1909年、さらに虫桑科を設立し、修学年数は1年であった。どちらも、張謇の大生系工廠の発展のために設立されたものである。大生系工廠の原料問題を解決するため、張謇は通海墾牧公司を設立したが、当時は農業管理経営者が不足していた。それゆえ、張謇は1907年「通師」に農場を併設し、農学に関する一連の設備に次々と投資した。さらに、師範科の学生には、農業科目を必修とすることが規定されていた。1908年、「通師」は日本の農科大学（注24）を卒業した照井喜三を農科の主任として採用した。

清朝末期の数年間、張謇の地方自治と企業経営の二兎を追う形で発展した「通師」は、

自身の教育改革の思想に則り、師範科以外の科目も数多く設け、総合学校に向けて発展し続けたと考えられる。その結果、「通師」に採用された日本人教習は、師範教育の分野だけにとどまることはなかった。

3 吉澤嘉寿之丞・森田政夫妻と張謇とのかかわりの調査

京都外国語大学の創設者である森田一郎氏の御両親、吉澤嘉寿之丞・森田政夫妻は 120 年前張謇に招かれ、中国に渡った。通州地域で 10 年以上教鞭をとった。本節では吉澤嘉寿之丞・森田政夫妻と張謇とのかかわりを調査し、京都外国語大学創設の背景の一端を明らかにする。

3.1 吉澤嘉寿之丞・森田政夫妻に関する調査

3.1.1 吉澤嘉寿之丞・森田政夫妻の経歴

吉澤嘉寿之丞は 1874 年富山市に生まれ、1896 年 7 月東京物理学校「現・東京理科大学」を卒業した後、東北帝国理科大学（注 25）に進学し、同校を卒業した後、旧制会津中学校（現福島県立会津高等学校）の数学教師に赴任した。森田政と結婚した後、母校・東京物理学校の推薦により、明治大学高等予科の数学教師に就任していた。1903 年に妻の森田政、長男の一郎とともに、中国の通州（現在の南通市）に着任し、1903 年から 1906 年まで通州師範学校で物理、化学、算術を教えた。1906 年 1 月に通州城北高等小学校（張謇が創設した小学校。現・南通実験小学）に転勤した。1906 年 8 月から吉澤は如皋師範学校の教習も兼任し、数学、理科、図画などを教えた。1907 年、長男の森田一郎が小学校に入学するため、家族と共に日本に一時帰国した。

1908 年再び通州に赴き、如皋師範学校の教習に正式に就任し、同校で 1914 年まで勤めた（注 26）。1914 年帰国後、吉澤嘉寿之丞は、松本亀次郎、杉栄三郎と共に東亜高等予備学校を共同で設立し、中国人留学生を教えた。中華人民共和国の初代首相である周恩来など、のちに中国近代史上で名をなした多くの人はこの学校に留学していた。

森田政は 1880 年、福島県会津若松市に生まれ。生家は代々会津藩に出仕した。士族の子女として厳格な家庭教育を受け、女子師範学校である東京和洋女子学校の「和裁専攻」を終えると、会津若松の小学校に訓導として務めた。

吉澤嘉寿之丞と結婚した後、1904 年、夫と長男森田一郎と共に中国・南通へ、張謇が創設した「抚海垞家塾」（注 27）、通州女子師範学校の教師として赴任した。南通の幼児教育、女子教育の開拓者として名をあげた。1906 年、張謇は、通州師範学校附属の女子師範学校を設立し、森田政は女子師範学校の教習として算数、唱歌、体操などの科目を担当していた。1907 年家族と共に帰国した。

3.1.2 中国に渡った理由の検証

先行研究では、吉澤は東京物理学校で出会った王国維に推薦され、通州師範学校で教鞭

をとっていたという説がほとんどであった。張謇の日記によると、1903年3月1日、王国維は木造高峻、吉澤嘉寿之丞とともに通州師範学校に着任した（注28）。吉澤は王国維とともに通州師範学校に到着し、二人とも東京物理学校の同窓であることは、先行研究ではこれを根拠に、通説とされている。

しかし、王国維が東京物理学校に短期留学したのは、吉澤が東京物理学校を卒業した5年後の1901年であり、このほかにも、木造高峻もその時、この二人と共に通州師範学校に到着したため、この説はなお議論する余地があると考えられる。

吉澤がなぜ中国に来たのか、どのようにして張謇と出会ったのか、明確な記録は残っていないが、下記の仮説も考えられる。

南通での教習時代、吉澤は2度ほど帰国している。一回目は、具体的な時間の記録が残されなかったが、1903年6月の木造高峻の自殺が影響しており、1904年2月、妻の森田政とともに南通に戻った。二回目は、1907年に息子の森田一郎を日本の小学校に通わせるため、再び日本に帰国した。吉澤は、2回の帰国中、明治大学で教鞭をとっていた。京都外国語大学の最高顧問であった森田嘉一氏（吉澤嘉寿之丞・森田政の孫）の口述によると、吉澤は明治大学が運営する中国人留学生のための特別教育機関「経緯学堂」の数学教師としても働いていたという。

明治大学は近代において日本でいち早く中国人留学生を受け入れた教育機関の一つであり、その教員も大勢中国に招かれていた。吉澤は1900年頃から明治大学予科の教師をしていたが、1903年頃、明治大学は「経緯学堂」設立の計画を立て、教員を中国に派遣して視察させていた。それゆえ、吉澤が中国に渡ったのは、明治大学で働いた時、周囲の影響を受けてのことであった可能性が高いと考えられる。

3.1.3 森田政による音楽教育の実践

「学堂楽歌」（日本の「唱歌」にあたる）は、中国における近代音楽教育の始まりである。戊戌の変法では、梁啓超が精心の啓発のために音楽教育の重要性を説いた（注29）。清朝末期、中国の教育が徐々に近代化されていく中、新式学校でも「学堂楽歌」が重要な科目として推進された。そして、「学堂楽歌」では、最初は日本の学校の「唱歌」を模倣することで発展してきた。その多くは、当時日本に存在した歌謡曲の曲譜をそのまま使用し、新しい歌詞に書き直したものであった。

銭仁康(2001)の「学堂楽歌考源」（注30）には、張謇が作曲した「学堂楽歌」がいくつか収録されている。「池中之金鱼」「風車歌」、「蓮華歌」、「池中蒲」などがそれであるが、実際は「池中之金鱼」「風車歌」、「蓮華歌」は森田政の創作である。

張謇の日記では、張謇は森田政とともに歌を創作した、とある。下記はその日記の一部である（注31）。

森田教師欲編二歌，为述其意，用汉文编之：《池中之金鱼》：风吹池面开，一群金鱼排。

小鱼摆摆尾，大鱼喁喁腮。白鱼白玉琢，红鱼红锦裁。我投好食不须猜，和和睦睦来来来。又《莲华歌》、《风车歌》。《莲华歌》仍日本之旧，而尾易中国俗语；《风车歌》则更制：风车兮风车，圆转兮不差。风之亟亟兮，车之捷捷兮。人心不息兮，风车不息兮。

（森田教師は二つの歌を作りたいと思っていた。その歌の意味を伝えるために、中国語で編集した。「池の中の金魚」：風吹池面開，一群金魚排。小魚擺擺尾，大魚喁喁腮。白雨白玉琢，紅魚紅錦裁。我投好食不須猜，和和睦睦來來來。また「蓮華歌」「風車歌」を作った。

「蓮華歌」は日本の歌だが、文末には中国の俗語を使っている。「風車歌」の歌詞は風車兮風車，圓轉兮不差。風之亟亟兮，車之捷捷兮。人心不息兮，風車不息兮、といったように替えた。）

3.1.3.1 「池中之金魚」

以下は「池中之金魚」の曲譜である（注32）。



図3 「池中之金魚」の曲譜

森田政によって作られた「池中之金魚」について、日本語の歌詞を変えただけなのか、森田政が自ら作ったのか、について大阪教育大学名誉教授・松村直行（明治、大正の童謡・唱歌研究）に確認してもらった結果、明治時期にこのような日本の童謡はなかったことが分かった。

張謇の日記の内容と付き合わせると、森田政が自ら作曲し、張謇とともに歌詞を創作し、共作した可能性が極めて高いと思われる。「池中之金魚」は現在、中国最初の「学堂楽歌」と認められている。

3.1.3.2 「風車歌」

森田政が書いた「風車歌」の楽譜はまだ見つからないが、モデルとなった日本で流行していたものと、中国語の翻訳本が見つかった（注33）。



図4「風車」の曲譜

張謇の「風車歌」の歌詞は原曲を模倣したものに見えるが、最後に「人心不息兮」というフレーズが加えられていることで、歌の意味がより高いレベルに引き上げられていると考えられる。

しかし、張謇の創作した歌詞は原曲とともに歌えない。それゆえ、森田政は曲を作り直してから歌えるようにした可能性があると思われる。

3.1.3.3「学堂楽歌」を作った理由

森田政氏、金魚と風車をテーマにした曲を作った理由について、以下のような調査を行った。

森田政の家は代々会津藩の役人であり、士族育ちの彼女は会津に愛着を持っていた。会津の伝統民芸品である「起こり小法師」「風車」「初音」の三つは、『会津三縁起』として親しまれていた。400年ほど前、当時の会津藩長・蒲生氏郷が、役についていない藩士に作らせて、正月に売り出したのが始まりだと伝えられている（注34）。会津の「起こり小法師」中で最も古く、最も有名なのが会津張子である。一方、会津張子の中、金魚はよく題材として用いられている。それゆえ、森田政が風車と金魚をテーマにした曲を作って、故郷会津の文化を南通に伝えた可能性が非常に高いと考えられる。以下の図9は『会津三縁起』であり、図10は金魚を題材として会津張子である。

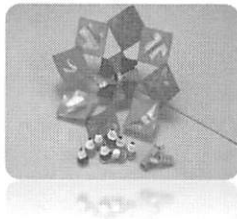


図5 『会津三縁起』



図6 福々金魚

3.2 張謇とのかかわり

張謇の日記や書簡には、日本人教習に関する記述はほとんどないが、幾つかの史実から、また吉澤嘉寿之丞・森田政夫妻に対する態度から、張謇とのかかわりの一端が窺える。吉

澤・森田夫妻と張謇とのかかわりについて、以下のような調査を行った。

3.2.1 張謇の吉澤嘉寿之丞への不満の検証

吉澤嘉寿之丞・森田政夫妻と張謇とのかかわりについて、劉佳(2018)の研究によると、木造高俊の自殺の影響から、吉澤は帰国後、長い間通州に戻れなかった。そのため張謇は王国維への手紙で「其甚不守信義」(彼は約束を守らない)と相当怒ったことが分かる。劉佳はこの手紙から、吉澤が張謇に背信行為をしたため、張謇が不満を持っていたと指摘している(注35)。しかし、この見方は厳密ではないと考えられる。

1904年2月、夫の吉澤とともに南通に渡った森田政氏は、当初は正式な教習とは言えなかったと思われる。また、彼女が勤務していた「抚海垞家塾」は、新式学校とは言えなかった。森田が最初に就いた仕事は、教習というより保母、家庭教師に近いと筆者は考えられる。

張謇は、かつて友人である内藤湖南と西村天囚に、師範教習と保母を探してくれるよう頼んだことがある。1903年、張謇が来日した際にも、この件について2人と手紙で伝えた。以下は原文の一部を引用する(注36)。

师范教习及保母二事，归后一月，必有书来。惟目前经济实属困难，师范教习和田君月俸可否略减？…至下走前拟订请折井夫人之合同，既经折井君酌量增减，其如何措词，亦请由西村先生先行见寄。

(日本から帰国して1ヵ月後、師範教習と保母の募集について手紙を送りたかった。ただし、今は本当に資金不足なので、師範教習和田くんの月給を下げることはできないだろうか？…出発前に折井夫人に提案された契約については、折井氏の裁量で増額・減額されていたが、西村様に文言の整理をお願いしたいと思う。)

以上のことから分かるように、張謇は和田を師範教習に、折井夫人を保母に招く予定だったが、資金不足であったため、この2人の給与を下げるよう交渉していた。そのためか、和田も折井夫人も、結局は中国に行くことができなかった。こうして、張謇の日本人保母採用の計画は失敗に終わり、失望したと思われる。

1904年2月、吉澤は妻の森田政、息子の森田一郎を連れて南通に到着し、その後、森田政は張謇の息子張孝若の保母兼家庭教師となった。張謇は、めったに自分の家で宴会を催さなかったが、吉澤一家を招き、珍しく自分の家で歓迎宴を開いた。そこから張謇の喜びを感じることができる。

王国維に宛てた手紙で吉澤に不満を表明した時期は1903年9月12日、もし吉澤が1903年6月に中国を離れてから、わずか3ヵ月しか経っていなければ、教育改革を決意した張謇は吉澤にあれほど腹を立てることはなかったと思われる。この時期、張謇が日本人家庭教師や日本人保母の招聘を計画していた。吉澤氏は南通に到着し、この計画を知り、張謇

に妻の森田政を推薦し、帰国して森田政氏に要請して一緒に南通に行った可能性が高いと考えられる。しかし、当時、吉澤の子供が生まれたばかりで、しかも木造高俊の自殺があったため、張謇との約束は期限切れとなり、日本人教習や保母の招聘の失敗で落ち込んだ時期に重なり、吉澤への不満を示したのだと考えられる。

3.2.2 張謇の吉澤・森田政夫妻への優遇

通州師範学校は、張謇が教育改革を行っていた清朝末期には資金不足に陥っていたが、日本人教習をかなり優遇していた。通州に家族を連れてきた吉澤を非常に好意的に扱った。吉澤が外出するときは、いつも車夫を手配して送迎していた。張謇は宋龍淵との手紙で、「送吉澤先生之车夫既不认识路，又不明白，可恨。吉澤此次大苦」（吉澤さんを乗せた車夫は道を知らず、理解できず、憎らしい、吉澤さんは今回非常に苦しんだ）と述べ、吉澤への関心を表していた（注37）。

このほか、一部の史料の行間から、張謇が吉澤・森田政夫妻をいかに好意的に扱っていたかが見られる。京都外国語大学の創設者である森田一郎氏は、2歳の時に両親の後と共に中国に渡り、日本に帰ってきたのは1907年のことである。1906年、一郎氏が5歳で小学校に入学する頃、張謇は吉澤を通州城北高等小学校の教習に転任することにした。しかし、森田一郎氏は中国での生活が長かったので、日本語もあまり上手ではなかった。御息子である京都外国語大学の最高顧問、森田嘉一氏は「父は日本語が少し不自由になっていたとのことで、小学校の先生に預けられ、日本語の勉強をしたそうです」と述べられている（注38）、それゆえ、1907年吉澤氏が一郎氏を日本に連れ帰り、教育を受けさせたと見られる。

終わりに

本研究では、日本人教習の誘致や日本の教育制度の受容を中心として、清朝末期の中国教育の近代化過程における江蘇省通州の中心人物である張謇による教育改革の活動を考察したものである。主に残された手紙・日記や公文書、当時の新聞や雑誌と中国や日本の教育関連の諸条例、さらに彼が招聘した日本人教習の子孫の口述筆記などに基づいて調査したものである。

1 日本人教習の誘致に関して

清朝末期、中国は次第に半植民地・半封建社会になり、その結果、1840年以降、中国社会の国を救うための活動の一部になっていた。教育の分野では、洋務派が様々な外国語教育機関や軍事教育機関を創設したが、制度方面の改革には着手しなかった。日清戦争後、日本から学ぶことが主流になった。教育分野では、日本教育制度の導入、新式学校の創設により、教師に対する需要が高まった。また、教師不足の問題を解決するために、師範学

堂の数も急速に増えていた。つまり、近代師範学堂の創設は、張謇だけの考えではなく、時代の流れでもあったと考えられる。

新旧の時代の交差点に位置する人物として、張謇の教育改革や地方自治の活動は常に新旧両方の特徴を伴っていた。時代の変化がもたらす新旧の思想の衝突とは別に、張謇の社会的地位と実権は彼自身が新しい思想を受け入れようとした際、プラスになった面もあり、また逆に制約された面も見過ごすことはできない。

彼が教育改革を行える実権が、清国政府との密接な関係に基づくものであったことである。このように、一度は政治から距離を置こうと思ったが、実際、初期の幕僚時代から、「状元」称号を受けた短い官員生活においても、教育改革や地方自治の際に推進した共和議会制度においても、常に清国政府と良好な関係を保っており、政治とは切っても切り離せない存在であった。

清朝末期の学制改革の過程では、日本の学制の導入が大きな比重を占めた。その結果、外国人教習のなかで日本人が非常に多かった。教育改革を推進していた過程で、張謇は日本の現行の学校制度を模倣するだけでなく、過去の法令からも学びたいと思い、張謇は、日中双方の法令に精通した木造高俊を教習として南通に招いた。このほか、張謇の教育改革の多くを担っていた通州師範学校は、張謇がさまざまな改革思想を実現するために必要とされ、次第に総合学校へと発展していった。

「通師」に採用された日本人教習は、師範教育の分野だけでなく、工学や農業などの職業教育の分野の教習も何人かいた。そこから張謇の先見性が窺え、「通師」の総合学校への継続的な発展につながるものであると張謇が考えていたと思われる。

2 吉澤嘉寿之丞・森田政夫妻に関して

先行研究では、吉澤は東京物理学校で出会った王国維に推薦され、通州師範学校で教鞭をとっていたという説がほとんどであった。1903年3月1日、王国維は木造高峻、吉澤嘉寿之丞とともに通州師範学校に着任した。吉澤は王国維とともに通州師範学校に到着し、二人とも東京物理学校の同窓であることは、先行研究ではこれを根拠に、通説とされている。しかし、王国維が東京物理学校に短期留学したのは、吉澤が東京物理学校を卒業した5年後の1901年であり、このほかにも、木造高俊もその時、この二人と共に通州師範学校に到着したため、この説はなお議論する余地があると考えられる。

当時の社会背景と吉澤の職歴の調査から、吉澤が中国で教えることを選択したのは、明治大学で働いた時、周囲の影響を受けてのことであった可能性が高いと思われる。また、張謇と知り合った理由については、さらに調査・研究の必要はあると思われる。

帰国した後、吉澤嘉寿之丞・森田政夫妻は中国人留学生の教育の道に進み、中国と日本の架け橋となった。両親の死後、その御子息である森田一郎氏は、京都の地に京都外国語

大学を設立し、積極的に留学生を受け入れ、学生同士の国際交流を図った。これはすべて、120年前に御両親とともに中国における張謇の教育改革と繋がることに起因していると考えてよい。以上のことより、吉澤・森田夫妻の日中の近代教育史における位置づけは、単に教師として中国に渡り、中国の師範教育への貢献ということだけではなく、日中間の友好・交流の中で重要な役割を占めていたと評価することができる。

注

- 1、張孝若『最艰难的创业者 状元实业家 张謇传』 新世界出版社 2016年
- 2、張謇『癸卯东游日记』 翰墨林印書局 1903年
- 3、朱嘉耀『南通师范学校史 第一卷 紀事』p194 南京師範大学出版社 2012年
- 4、張謇本人による森田政の記録は「森田政子」だが、森田家の親族によれば、実際の名前は「森田政」である、という。
- 5、『通州師範学校職員表・学生録 宣統三年』p41-42 翰墨林印書局 1911年
- 6、曹炳生と都樾編『吉澤嘉寿之丞和森田政夫婦在南通任教档案資料集』（非売品） 2018年
- 7、1916年、東京に設立された中国人留学生のための予備教育機関。中華人民共和国の初代首相である周恩来は、1917年にここに留学していた。
- 8、清国学部總務司編「曆年学生人数比較図」『学部第一次教育統計図表』、1907年p14。1907年のデータは、1902年から1906年までのデータのない直隸、四川、広東三省を除いたものである。
- 9、張之洞『奏定學堂章程・学務綱要』 1904年
- 10、清国学部總務司編『学部第一次教育統計図表』、1907年を参考に作成したものである。
- 11、清国学部總務司編『学部第一次教育統計図表』、1907年を参考に作成したものである。
- 12、清国学部總務司編『学部第一次教育統計図表』、1907年を参考に作成したものである。また、初等と高等の両方を持つ小学堂は、「兩等小学堂」と呼ばれる。
- 13、大清律例館編『大清律例汇輯便覽』29卷p2 1903年
- 14、1882年（明治15年、壬午の年）、朝鮮のソウルで起こった政変。
- 15、李鴻章（1823年2月15日—1901年11月7日）は、中国清代の政治家。字は少荃。洋務運動を推進し、清後期の外交を担い、清朝の建て直しに尽力した。日清戦争の講和条約である下関条約で清側の欽差大臣（全權大使）として調印を行った。
- 16、清末の政治集団で、光緒帝のもとで、皇太后のもとでの保守派と対立する有力な政治勢力であった。リーダーである翁同龢（1830年—1904年）は、清末の政治家・書家。1894年の日清戦争では主戦論を唱えていた。光緒帝の親政と共に李鴻藻と並ぶ派閥（帝党）の領袖となり、西太后・李鴻章ら后党と対立していた。
- 17、張之洞『張之洞全集』 河北人民出版社 1989年

- 18、劉坤一「兩江總部堂劉坤一批」 『通州師範三十周年記念刊』 p3 所載 1902 年
- 19、章開沅『張謇伝』 p226 浙江古籍出版社 2021 年
- 20、劉佳『張謇の南通における近代教育普及への貢献 ー日本モデルの教育制度の受容を中心にー』（東京学芸大学博士論文） 2019. 9. 25 pp. 41－53
- 21、「通州師範学校と教科書疑獄ー論張謇の人才觀ー」 劉佳 『中国史跨学科博士生論壇文集』 pp. 270-293。
- 原表は森田政が掲載されていなかった。しかし、この時期、通州女子師範は通州師範の附属校であるため、筆者が森田政に関する部分を補足した。
- 22、張謇「変法平議(1901年)」 『張謇全集』第4巻所収 上海辞書出版社 2012年 p. 50
- 23、張謇「請設工科大学公呈(1905年)」 『張謇全集』第1巻所収 上海辞書出版社 2012年 p. 100
- 24、明治時期の帝国大学令によって設置された農学の分科大学
- 25、東北大学の前身である東北帝国大学は 1876 年にスタートした「札幌農学校」を大学に昇格させた「農科大学」と、仙台の地に新しく造られた「理科大学」という二つの大学からなっていた。
- 26、曹炳生と都樾編『吉澤嘉寿之丞和森田政夫婦在南通任教档案資料集』（非売品）、2018年
- 27、1904年、張謇が自宅に設立した小さな学校で、現在の幼稚園にあたる。
- 28、張謇「柳西草堂日記」 『張謇全集』第8巻所載 上海辞書出版社 2012年 p. 532
- 29、張静蔚「张謇与学堂乐歌」 『音乐艺术』（上海音乐学院学报）所載 2003年第2期 pp. 22-26+4
- 30、錢仁康「学堂乐歌考源」 上海音楽出版社 2001年
- 31、張謇「柳西草堂日記」 『張謇全集』第8巻所収 上海辞書出版社 2012年 p. 579
- 32、張静蔚「张謇与学堂乐歌」 『音乐艺术』（上海音乐学院学报）所収 2003年第2期 pp. 22-26+4
- 33、張静蔚「张謇与学堂乐歌」 『音乐艺术』（上海音乐学院学报）所収 2003年第2期 pp. 22-26+4
- 34、会津若松観光物産協会のホームページ「八重の生活にもなじみのあった、新年を祝う会津の伝統民芸」。
<http://www.yae-mottoshiritai.jp/seishin/sanengi.html> (2022. 11. 11の画面である)
- 35、「通州師範学校と教科書疑獄ー論張謇の人才觀ー」 劉佳 『中国史跨学科博士生論壇文集』 pp. 270-293
- 36、張謇「致内藤湖南氏西村天囚函」『張謇全集』第2巻所収 上海辞書出版社 2012年 pp. 124-125
- 37、張謇「教育手牒」『張謇全集』第3巻 上海辞書出版社 2012年 p. 1413

38、河島順一郎「和と不撓不屈と一ある会津人夫婦の挑戦」 『歴史街道』2012年第6期所載 pp. 122-126

参考文献

(日本語文献)

- 1、東洋大学編『東洋大学創立五十年史』東洋大学 1938年
- 2、阿部洋『中国の近代教育と明治日本』福村出版 1990年
- 3、東京物理学校編『東京物理学校五十年小史』東京物理学校 1930年
- 4、阿部洋編『日中関係と文化摩擦』巖南堂書店 1982年
- 5、劉佳「張謇の南通における近代教育普及への貢献—日本モデルの教育制度の受容を中心に—」東京学芸大学博士論文 2019年
- 6、蔭山雅博「清末江蘇省における「日本型」学校制度の導入過程—張謇の活動を中心として—」『国立教育研究所紀要』第121集所載 1992年

(中国語文献)

- 1、張謇『癸卯东游日记』翰墨林印書局 1903年
- 2、張孝若『最艰难的创业者 状元实业家 张謇传』新世界出版社 2016年
- 3、朱嘉耀『南通师范学校史 第一卷 纪事』南京師範大学出版社 2012年
- 4、張謇『張謇全集』全8卷 上海辞書出版社 2012年
- 5、章開沅『張謇伝』浙江古籍出版社 2021年
- 6、大清律例館編『大清律例汇辑便览』29卷 1903年
- 7、周新国・張慎欣編『張謇辞典』広陵書社 2021年
- 8、叶志如「清末学政学务章程史料」.『历史档案』,1989(02):52-60+41. p 53「付:教育会章程清单」
- 9、『通州師範校友会雑誌』第1-7期、南通師範校友会、翰墨林印書局、1911-1917年
- 10、孫模『說雪齋文選』南通市文学芸術界連合会 2011年
- 11、郭秉文『中国教育制度沿革史』福建教育出版社 2007年